くまざさ

全日制110年定時制100年次の一歩へ

第79号
発行
釧路湖陵同窓会
くまざさ編集委員会
発行日
2022（令和４）年
８月13日
印刷所
藤田印刷㈱

「この丘で…」は私たちの「テーマソング」
門脇名那さん（定56期・生徒会長）

今年、創立から百周年を迎える湖陵高校定時制には、「第二の校歌」とも呼べる〝テーマソング〟が存在します。今から18年あまり前に作られたこの歌の背景や経緯を、作詞者でもある当時の生徒会長・門脇名那さん（定56期・２００５年卒）に伺いました。

「この曲は２００４年、私たちにとって学生生活最後となる学校祭に向けて『この丘』、つまり湖陵高校での私たちの青春模様を歌ったものです。そもそも定時制の文化祭は、人数が少ないこともあって入学当初からあまり盛り上がらないものでした。そこで２年時からは、自分たちのクラス発表において歌を歌うことにしたのです。この時はギターの弾けるクラスメートを見つけて「なごり雪」を歌いました。

また次の年には、ピアノの弾けるメンバーを加えてトリオで歌うこともできましたが、生徒会執行部で会長となった４年次には、長く思い出に残るオリジナル曲を作りたいと考え、執行部の仲間や先生方にも協力を仰いで出来上がったのが『この丘で…』でした。私が作詞を担当し、同じ４年生で執行部の濱野貢さんが作曲を、さらに音楽の佐藤陽一先生と工藤弘美先生に補作詞と編曲をお願いして、なんとか完成させることができました。

この年の湖定祭のテーマは『エピローグ～みんなで唄おう』というもので、働きながらも湖陵の丘で学ぶ私たちの気持ちを表現できたらとの思いを込めて作りました。体育館の床に車座になって聴いてくれた生徒たちの中には、感情があふれて涙ぐむ子もいたほどと聞いています。その後は、長くその存在が忘れられていたようで、私たちが卒業してからは湖定祭でも歌われなくなっていたようですが、ちょうど10年後、２０１４年度の学校祭において、長く忘れられていたこの曲が復活され、再び歌われるようになっています。現在は、定時制のホームページでも聞くことができますが、古い音源のため雑音が多くて聞きとりにくいため、新しく録音し直す予定です。皆さんも是非一度、聴いてみてください。」

西村貞広（湖陵30期）

「この丘で…」

大切なのは何か　迷いながらも走ってた
一人じゃ実現できなかった
仲間とともに作った今がある
友の頑張っている姿が　自分の力に変わる
ぶつかり合い　喧嘩しながら
不器用な足跡つくっていこう

この丘で自信を持って　夢叶えよう
壁にぶつかり　つらい時には　この丘を
思い出そう

夕日に向かい歩く　その先の希望を夢見て
あきらめた夜もあった　悲しくて涙を流
した夜もあった
夕日の向こうにある　あたたかな場所を
めざして
時には友と手を取りあい　大きな希望と
いう道を歩いていこう

この丘には　僕らをつつむ　やさしさが
ある
この丘には　夢へと進む　強さがある

信じられない世の中で　ここへ集まって
きた理由は　それぞれだけど
言い訳ばかり　逃げてばかりの　僕らは
もういない

この丘には　僕らをつつむ　やさしさが
ある
この丘には　夢へと進む　強さがある

（追加歌詞）
うつむきながらこの丘を　目指してた
いつしか夕日を見ながら　この丘を見ら
れるようになった
いつしかこの丘に　誇りを持てるように
なった
そして僕にはこの丘が　忘れられない大
切な宝物になった

目次

塙新校長インタビュー……２ページ
新しい学科へ……３ページ
周年記念事業……４ページ
定時制座談会……５ページ
各地湖陵会……６ページ
全国で頑張れ……７ページ
学校祭・編集後記ほか……８ページ

湖陵同窓会 HP　http://kushiro-koryo.sakura.ne.jp/

リーダーたれ、イノベーターたれ!!

第38代校長　塙 浩伸さん

全国的な新型コロナ禍の余波がまだ、ここ釧路地方をも覆い尽くしていた今年4月、北海道教育委員会（道教委）から第38代校長として着任された塙 浩伸さんは、1965（昭和40）年の生まれ。札幌市で生まれ育ち、高校卒業後は都内の専門学校や私立大学を経て、最終的に進んだ先は京都にある立命館大学。立命館といえば文系イメージの強い大学ですが、ご多分にもれず塙校長が専攻されたのも文学部の地理学科だったといいます。

「もともと地図や鉄道のマニアだったので、自分にはぴったりの大学でした。ここで経済地理学、今で言う地政学のようなことを勉強しました。地理学は言わば空間を科学する学問でしたね」と青春時代を述懐。ここで社会科の教員資格を取得し、卒業後は郷里の北海道へ戻って高校の社会科教諭としてキャリアをスタートします。

留萌高校の定時制を振り出しに、札幌琴似工業高校や帯広柏葉高校で地理などを教え、その後、学校の現場を離れて道教委に異動、道立教育研究所、檜山や上川などの教育局、本庁で勤務されました。特に本庁では、各地域における高校の統廃合や学科転換、高校の魅力化などを担当されていたそうです。

2018（平成30）年度には、白糠高校に校長として赴任。「学校での勤務は15年ぶりだったのでドギドキでした」と塙校長。2年間の白糠勤務の後は、再び道教委に戻り、そして今年度、2度目の釧路管内勤務となった高校は釧路湖陵高校。折しも今年6月、2年後の2024年度から普通科が「学際領域に関する学科」に転換されることが道教委より発表されました。

「自ら学ぶ力を」と塙校長

一部の関係者からは「湖陵から普通科がなくなるのか?」という不安の声も聞かれましたが、塙校長によると「この新しい学科では、これまでの普通科での学習に加え、生徒自身の興味・関心や進路希望等に応じた探究的な学習をより一層重視します。『やりたいことをやってみる！夢中になれる学びがここにある！』をキャッチフレーズに、高い希望を実現できる学校を目指します。」とのこと。

近年、高校生全体の約7割が在籍する普通科においては、生徒の能力・適性や興味・関心等を踏まえた学びの実現に課題があると指摘されており、課題解決の方策の一つとして文科省が打ち出した「普通科高校改革」の一つの回答がこの「学際領域に関する学科」のようです。

「これからは受け身の学習ではなく、自らが進んで学ぶ力を身に付けなければ、これからの変化の激しい時代を生き抜いてはいけません。そのために私たち教師が諸君の背中を押します。日々進化を続けるAIにだって負けぬよう、人から教えられて問題を解決するのではなく、自らが学んで解決していけるよう『湖陵生よリーダーたれ、イノベーターたれ』の言葉を贈ります」。

西村貞広（湖陵30期）

2024年度から学科転換が検討されている釧路湖陵高校

普通科「文理探究科」に
学科転換は道内初めて

9月の配置計画決定で正式に

今年6月に北海道教育委員会から示された道内公立高校配置計画案では、2024年度から釧路湖陵高校の普通科4学級を普通科新学科に学科転換する方向で検討されています。9月の公立高校配置計画決定の際、正式に決定しますが、道内において普通科改革を踏まえた普通科の学科転換は初めてであり、本校では「(仮)文理探究科」として検討しています。

進学校として地域の期待も大きく、これまでも学校、生徒、保護者が一体となり学力アップに努めてきました。その成果はたびたび「くまざさ」に掲載していました。しかしながらここ数年、普通科の入試倍率は1倍を切ることも珍しくありませんでした。

そこで普通科の魅力と特色をさらにアップすることを目的に、道内の進学校に先駆けて学科転換を実施することにしました。

「学際領域に関する学科」を選択

文科省は、普通科の改革にあたり次の三つ学科設置を可能にしました。①学際的・複合的な学問分野や新たな学問領域に即した最先端の特色・魅力ある学びに重点的に取り組む「学際領域に関する学科」②地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために、現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に注目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組む「地域社会学科」③その他の特色ある学びに取り組む「その他普通科」―です。

そのうち同校は①の「学際領域に関する学科」を選択しました。この度の学科転換は、現在の普通科の必修科目など基本的なカリキュラムをベースに、総合的な探究の時間の授業を増やしたり、探究的に学習するためのスキルなどを学ぶ学校独自の科目を開設したりするほか、難関大学の受験にも対応できるハイレベルな科目を開設するなど、進学校としてさらなる発展を目指すものです。

また、本校では世界で取り組まれているSDGs（持続可能な開発目標）などの実現に向け、国内外の大学や企業、専門機関などによる学校教育活動を支えるコンソーシアムを構築するとともに、同校とコンソーシアムのパイプ役として教育コーディネーターの配置も計画されています。

一方理数科については、これまでも探究的な学習に取り組んでおり、その成果を普通科の学科転換にも生かしていくことから、同校では、理数科の学科名変更も検討しています。

地域や同窓生の協力不可欠

現在、普通科5学級、理数科1学級です。全盛時には普通科9学級、理数科1学級がありました。少子高齢化など社会情勢の変化にともない、同校ではいろいろな取り組みを実施してきました。学科の転換は、「釧路湖陵高校」が道内有数の進学校として、さらにステップアップする契機だと考えられています。このためには、地域や同窓生の協力も必要です。

新しい湖陵高校に期待したいと思います。

星　匠（湖陵30期）

全日制110周年定時制100周年

9月22日に記念式典
事業協賛にご協力を

今年度は、全日制110周年定時制100周年の記念の年です。記念事業についてご紹介します。

・記念事業

①トレーニングルーム設置

②全日制記念講演会

2022年9月16日（金）午後1時30分から午後3時10分まで、釧路湖陵高校第1体育館で行います。講師は、東京大学医学部教授　栗原裕基さん（湖陵29期）

③定時制記念講演会

2022年9月21日（水）午後5時40分～午後6時40分まで、同第1体育館で行います。講師は、知床ダイビング企画水中カメラマン　関勝則さん（湖陵定時25期）

・記念式典・祝賀会

記念式典は、2022年9月22日（木）午後1時からコーチャンフォー釧路文化ホール（釧路市民文化会館）＝釧路市治水町12―10＝で行います。

祝賀会は、同日午後6時から釧路センチュリーキャッスルホテルで開催します。会費は6000円を予定しています。

なお、祝賀会については今後の新型コロナウイルスの感染状況により、中止または内容を変更しての実施となることもあります。この場合、湖陵高校ならびに同窓会ウェブページ上でご案内いたします。

・記念誌

12月末をめどに発刊します。価格は2000円（送料・税込み）を予定しています。

・協賛金

記念事業を実施するにあたり、記念事業実行委員会では協賛金を募っています。

一口千円です。20口以上で地元新聞へご芳名（事業所名）を掲載、30口以上で新聞掲載と記念誌を謹呈します。

申し込み締め切りは8月19日です。

※記念式典・祝賀会、記念誌、協賛金のお申し込みは、釧路湖陵同窓会のホームページ「トピック」をご参照ください。

記念事業のうち全日制、定時制の講演会は、それぞれ同窓生の出席も可能としています。出席を希望される場合は、事前に湖陵高校までお申し込みください。

お問い合わせは

〒085―0814　釧路市緑ヶ岡3の1の31

釧路湖陵高校　古野輝昭副校長

電　話　0154―43―3131

FAX　0154―43―3134

メール　Furu-Teru1014@hokkaido-c.ed.jp

仲良しコンビ、見事合格

釧路　栗原君（東大）と滝本君（一橋大）

栗原裕基君

滝本峰男君

国立大学一期校の最後の合格発表が二十日行われ、釧路湖陵高校から栗原裕基君（東大）と滝本峰男君（一橋大）がそれぞれ釧路から数年ぶりに東大と一ツ橋大に合格し、先生や両親から祝福を受けている。

二人とも現役で合格するという快挙。東大理類三に合格した栗原君は厚岸町太田の出身で、父親、義ぐさは小学校教員、釧路で下宿生活をしながら高校に通い、釧路からは十一年ぶりに一ツ橋大に合格した。

滝本君は自宅で発表の掲示を待っていたが東京まで発表を見に行っている栗原君から電話があり、「ダメ。一ツ橋一本やりだった」という滝本君は「心配もあったが合格を知ると自分でもよくやったと思わず指手したという。すぐ担任の祖田和幸先生からも報告、大学は違っても栗原君と一緒にがんばります」と張り切っている。

「候補は受かった、おまえも大丈夫」とまず栗原君の合格を知った後、東京にいる兄の明弘さんから「合格」の電報をもらい、美義さんらと一緒にやってきたと大喜び。

栗原さんの東大合格を伝える釧路新聞（1977年3月21日）

羅臼の海見つめ四半世紀

日曜インタビュー

魅力　四季それぞれに

知床ダイビング企画代表取締役　関　勝則さん

「これからも海を見守りつつ、現状や魅力を発信していきたい」と話す関さん

せき・かつのり　釧路市出身。釧路湖陵高校（定時制）卒業後、釧路市職員を経て1989年、羅臼町で「知床ダイビング企画」を設立。水中ガイドや水中写真・ビデオ撮影、ダイビングインストラクション、水産資源調査に携わるなかで、環境保全に関する講演活動も行う。59歳。

ダイビングインストラクターで水中カメラマンの関勝則さんが羅臼町に移住し、「知床ダイビング企画」を設立して25年目を迎えた。関さんはこれまで流氷を頭上に見上げる幻想的な光景やサケ・カラフトマスの産卵など撮影し、学術的にも高い評価を受けている。まちを変える豊穣の海を水中から見つめ続けた四半世紀。羅臼の海の魅力や変化、これからの活動について聞いた。

（聞き手・原田未央）

水温差が生む光景

―羅臼への移住について聞かせてください。

関　生き方を模索していた23歳の時に友人に誘われて釧路の海で初めて潜りました。それまで泳げなかったのですが、潜ることも面白かったので仕事にしたいと考え、すぐにCカード（認定証）を取得し、釧路のダイビングショップでウトロを中心に海中ガイドをしていました。何度か羅臼でも潜る機会があったのですが、初めての時は足の踏み場がないくらい非常に魚床がそこにはありました。5年は勧めたのち、1989年に移住し独立しました。

―水中から見た羅臼の海の魅力は。

関　水温が一度変わると水中の顔ぶれもガラッと変わり、年間20度の差があるとされ、研究者の取り組みが残した栄養で生き物が湧きあがる春、海草がうっそうと茂る夏、サケ・マスが遡上し海から川、山への「命のリレー」が始まる秋、流氷やクリオネなどダイナミックで繊細な冬。羅臼の海は四季がはっきりしていてそれぞれの魅力があり、飽きることはありません。

未知の生態実感

―25年間で印象に残っていることは。

関　以前から確認していましたが、種類が分からなかった魚を撮影し調査を依頼したところ、2004年に新種ラウスカジカと認定され、研究者の取り組みが名を付けていただきました。また、本来、深海に生息するイカが浅い水深で姿を見せるなど羅臼にはまだ知られていない生態があることを実感します。

―これからの活動について聞かせてください。

関　05年に知床は自然遺産に登録され、近年では海上観光が活発となり羅臼の海が観光地として注目されています。初めて羅臼の海に潜ってから約30年。水温や生態系が微妙に変化し、確実に進行する温暖化を感じます。流氷の硬さも昔に比べると柔らかくなりました。これからも海を見守りつつ、現状や魅力を発信していきたいです。

関さんのインタビューを掲載した釧路新聞（2013年8月11日）

思い出いろいろ

定時制座談会

釧路湖陵高校定時制１００周年を記念して、湖陵高校で定時制の先生、卒業生による座談会がこのほど開かれました。座談会のお話を聞いていて、学校生活を垣間見ることができました。座談会の詳細は、12月末に発行予定の記念誌に掲載しますが、その一部をご紹介します。

湖陵高校で行われた高校生活を振り返った座談会

・定時、全日の分けなく

１９５４年から87年まで定時制で教鞭を執られていた佐藤義雄さんからお話を聞かせていただきました。

釧路市公民館長などを務めていた丹葉節郎さん（釧中８期）が、後援会を担っていた際、それまで卒業証書は定時制と全日制に分けていましたが、「それはおかしい」と異論を唱え、今は分けていません。ともに〝湖陵高校卒業〟です。

スクールバスが運行されていた時代もありました。佐藤さんによると、学校から共栄大通などの駅裏を回り、最後は太平洋炭砿までだったそうです。

また、修学旅行は11泊12日くらいの時もあり、四国の金比羅さんへ行ったこともありました。夜は移動、目が覚めたら朝から各所を見学していました。

定時制に赴任してから教員を34年間貫いてきました。佐藤さんは座談会の中で〝湖定精神〟という言葉を使ってらっしゃいました。今も持ち続けていて、「どちらの学校に勤務されていましたか」と聞かれると、「湖陵定時制」と答えているそうです。。

・修学旅行でアシベへ

今回司会をお願いした浅野目正義さん（19期）は、中学校の時に先生から定時制を勧められました。クラスにはいろいろな職業を持つ仲間がいて、とても結束が強く、新型コロナウイルスの影響でここ2年は同期会を開催していませんが、それまでは毎年のように開いていました。

また、修学旅行で東京に行った際、バンドをしていた浅野目さんは、スパイダースが見たくてジャズ喫茶のＡＣＢ（アシベ）に立ち寄ったお話もしていただきました。

浅野目さんは、バンドだけではなく放送、演劇などいろいろなクラブ活動をしていました。高体連の際には、卓球部にも名前を連ねていました。

・〝湖定精神〟にぐっと

周年事業の実行委員長も務め、定時制の同窓会長を務める吾妻正昭さん（67期）は、30代で2年生に編入学して17、18歳年下の同級生と机を並べました。先生たちの愛情を感じ、4年生の時には生徒会長、卒業後は同窓会長に請われました。佐藤さんがおっしゃっていた〝湖定精神〟という言葉が胸に響いていました。

門脇名那さん（56期）は、22歳で入学しました。当初は、年上だったこともあり、ちょっと冷めて学校を見ていたところもありました。でも、「自分にできることをやりたい」と2年生から湖定祭で歌うことになり、4年生で生徒会長になった時にはオリジナル曲「この丘で…」の作詞を担いました。（1ページ参照）

河瀬三千代さん（17期　旧姓佐藤）さんは、「クラスの仲は良くて、年上のおじさんもいたり、（授業中）居眠りしている人がいても先生たちは大目に見ていました」と振り返ります。また、伊藤頼子さん（同　旧姓鈴木）は、自宅で豆腐をつくっていましたので、朝3、4時に起きて豆腐づくりをして、一休みしてから学校に行く生活を4年間しました。とても大変だったようですが「卒業資格がとれて定時制でよかった」と話していました。　星　匠（湖陵30期）

あの日の同窓会
湖陵、江南同じ日に

１９６２年８月19日午後1時から、釧路湖陵高校と釧路江南高校の同窓会が同じ日に開催されました。湖陵は「ニュー東宝」、江南は「銀の目」を会場にしました。集まった同窓生はそれぞれ5～６００人。これを伝える釧路新聞には、「釧路湖陵は戦前の釧路中学、そして江南は釧路高女として古い歴史を持っているが、湖陵には戦後卒業の女子また江南にも男女卒業生が仲よく出席」とありました。

ライバルの同窓会

湖陵 江南 時を全く同じくして

「ライバルの同窓会」との見出しで同窓会が紹介（1962年８月20日　釧路新聞）

各地湖陵会だより

関西湖陵会

第13回関西湖陵会（小川清至会長　湖陵17期）の総会・懇親会が5月21日に大阪市内のヴィアーレ大阪で開かれ、22人が参加しました。校歌斉唱の後、小川会長が「本当にお久しぶりです。2年間のブランクは大きく、みなさんと元気にお会いすることができ、とてもうれしいです。母校はますます発展、進歩していますので、これからも支援をしたいと思います」とあいさつしました。

このあと来賓として釧路湖陵高校の塙浩伸校長が「引き続き湖陵高校は躍進します。そのために誠心誠意努力します。今後もご協力をお願いします」、蝦名大也釧路市長（湖陵29期）は「釧路市は新しい産業の創出に向けて、いろいろと進めています。大阪からもバックアップをお願いします」、東京湖陵会の割方俊介会長（湖陵28期）は「校歌を聞くと同窓会はよいと思いました。10月の東京湖陵会も張り切って準備したいと思います」、釧路湖陵同窓会の青木一晃幹事長（湖陵27期）は「コロナ禍で授業ができない生徒たちのために、タブレット端末を同窓会で購入しました。今後も同窓会は学校支援を続けたいと考えています」、札幌湖陵会の佐藤浩司幹事長（湖陵35期）は「札幌湖陵会は今年7月2日に開催しようと準備をしています。みなさんとお会いする機会が多くなると思います」とそれぞれ祝辞を述べました。このあと塙校長から全日制110周年定時制100周年記念事業についてお願いがありました。

懇親会は、西田暉至さん（湖陵7期）の「関西湖陵会が今日できたことに乾杯！」との発声で始まりました。参加者のみなさんは3年ぶりの開催とあって、高校時代の思い出や近況の話に花が咲いていました。

役員は次の通りです（敬称略）。

会長　小川清至、副会長　林正樹（湖陵18期）、幹事　中村麻文（同35期）・一見京子（同36期）

星　匠（湖陵30期）

関西湖陵会の参加した同窓生のみなさん

札幌湖陵会

第34回札幌湖陵会（稲村尊史会長　湖陵26期）定期総会・懇親会が、7月2日に札幌市内のポールスター札幌で開かれ、釧中31期から湖陵67期まで196人が参加しました。

物故会員への黙祷のあと、会場に校歌が流れました。稲村会長は「大変お久しぶりです。この2年間は、役員で協議を重ねてきましたが、残念ながら（札幌湖陵会を）中止せざるをえない状況でした。感染対策、会場の確保などいろいろ悩みましたが、こうして無事に開会できることに胸をなでおろしています。高校時代の思い出を肴に、先輩、後輩、同期と酒を酌み交わしてください」とあいさつしました。

続いて来賓を代表して釧路湖陵高校の古野輝昭副校長（湖陵41期）が「今年は全日制110周年、定時制100周年を迎えます。9月22日に記念式典と祝賀会、その一週間前には記念講演会、また、記念誌制作、トレーニングルームの設置などを予定しています」と協力を呼びかけ、学校の活動について「これまでの伝統を重んじると同時に文武両道として進学率の向上、部活動の充実に努め、社会に貢献できる人材の育成に教職員一同、日々努力しています」とSSH（スーパーサイエンスハイスクール）などの取り組みを紹介しました。

次に蝦名大也釧路市長（湖陵29期）は「今年は北海道の中で市制100年を迎えた市があり、ひがし北海道では釧路市だけです。また、釧路市では小中学校の連携をとる義務教育学校化、そして湖陵高校につなげていきたいと考えています」と釧路市の状況を説明しながら祝辞を述べました。このあと会務会計、令和4年度の新役員が承認されました。

懇親会は、釧中で唯一参加された石井忠雄さん（釧中31期）が「今年は釧中が認可されて110年の記念の年。音頭をとれるのはうれしい」と乾杯して懇親会が始まりました。

最後は、釧路湖陵同窓会の島本孝一会長（湖陵19期）、東京湖陵会の割方俊介会長（湖陵28期）、関西湖陵会の小川清至会長（湖陵17期）がステージに上がり、中締めを行い閉会しました。

役員は次の通りです（敬称略）。

会長　稲村尊史、副会長　浅沼和明（湖陵28期）・長浜光弘（同32期）、幹事長　佐藤浩司（同35期）、幹事　畑みゆき（同28期）・得地哉（同37期）・残間渉（同45期）、会計　福島真理子（同37期）・小波朋子（同42期）、会計監査　菊地克保（同13期）、名誉顧問　中川晋（同11期）

星　匠（湖陵30期）

石井さんの乾杯で懇親会がスタート

晴れの全国大会出場
陸上、水泳、美術で

今年、スポーツと文化の分野で全国大会へ進んだ生徒を紹介し、全国での活躍を期待します。

陸上

女子5000㍍競歩の伊藤朱里さん（3年）、女子100㍍障害と400㍍障害の2種目で鈴木彩絢さん（2年）が全国切符を手に入れました。

伊藤さんは中学時代、800㍍と1500㍍でした。高校に進学した1年の夏、競歩に転向、新人戦から本格的に競技を始めました。

6月14日から釧路市民陸上競技場で行われた全道高体連では、初日に登場。上位4人が全国行きを獲得できます。伊藤さんは、3位集団でレースを進め、終盤は3位選手に放されたものの4位を守り切りました。

「レース途中に反則をとられてあせった」と伊藤さんは振り返りますが、新釧路川の堤防や学校で練習を積み重ねてきた成果を発揮しました。「全国大会では自己ベストを」と意気込んでいました。

一方鈴木さんは、小学生から障害競技を始めました。毎週水曜日と土曜日は釧路市民陸上競技場で障害競技の練習、そのほかの日は、学校でのトレーニングに汗を流していました。

全道高体連は「調子がよかった」と言います。初日の14日、100㍍障害が行われました。予選、準決勝、そして400㍍リレーに出場して決勝に臨むハードスケジュールでした。しかし、そんな疲労を吹き飛ばすハードリングを見せ、自己新をマークして4位に入り、まず全国への出場権を獲得しました。

16日は400㍍障害準決勝、決勝が行われ、全体7番目の成績で決勝に駒を進めました。スタート良く飛び出した鈴木さんは、先頭争いを繰り広げ3位でゴールしました。釧路、根室地域の選手が2種目で全国へ進出するのは2018年以来の快挙。鈴木さんは全国について「まずは予選突破を」と話していました。

全国大会は8月3日から7日まで徳島県鳴門市で開催されます。

全国大会へ出場する池田さん、伊藤さん、鈴木さん、小田さん（左から）

水泳

200㍍バタフライで全国を決めたのは池田陽菜さん（2年）です。水泳は4歳から始め、小学生から家族からにも勧められバタフライに取り組みました。釧路スイミングクラブ（SC）でめきめきと頭角を現し、中学1年でJOCジュニアオリンピックカップ北海道予選のバタフライで2冠を達成するなど活躍しました。

7月2日から3日まで北海道立野幌総合運動公園総合体育館水泳プールで全道高体連が開かれました。池田さんは予選を2位で通過。決勝では、「お互いに刺激し合っています」という1年生の選手を冷静に追いかけ、2位でタッチして全国を手にしました。「（1年生の選手を）意識しながらも、自分のペースで泳ぐことができました」と振り返っていました。

今も釧路SCで練習を重ねる池田さん、全国大会の目標は「自己ベスト更新」ときっぱり。

全国大会は8月15日から18日まで高知県高知市を舞台に繰り広げられます。

美術

美術部の小田侑季さん（3年）は東京都内で開催される第46回全国高校総合文化祭東京大会へ出品しました。

作品は旧約聖書の「創世記」に登場する「バベルの塔」をモチーフにした「Bāb-il-i」（F30号）。昨年10月に開かれた第55回全道高校美術展・研究大会（石狩大会）で、平面作品1778点から10点が全国推薦されましたが、その中に小田さんの作品が選ばれました。

小田さんは中学校時代も美術部に所属していました。最初はアクリル画でしたが、ペン画に転向しました。小田さんは「ものづくりが好き。手先が器用だったので細かく描きたいと思いました」と話します。推薦された作品も細かい所まで表現されています。

同東京大会は7月31日から8月4日まで都内各所で開催されます。小田さんは「交流会や講演会が楽しみ」と話していました。

星　匠（湖陵30期）

あんどん行列 グラウンドで

第71回湖陵祭が、7月8～10日に開かれ、そのうち伝統行事の「あんどん行列」は前夜祭の8日に実施されました。新型コロナウイルス感染防止の観点から、市中に出るのではなく、グラウンドを2周しました＝写真＝。各クラスで趣向を凝らした「あんどん」が練り歩きました。

5人がエコツー発表 NZと合同プロ講座

ニュージーランドとの合同プログラミング講座「Code・Camp（コード・キャンプ）」の報告会が7月2日にオンライン形式で行われました。釧路湖陵高校2、3年生5人が、釧路市阿寒地区を中心とする「北海道のエコツーリズム」と題したウェブサイトを英語で発表しました。

この事業は北海道教育委員会とエデュケーション・ニュージーランド（ニュージーランドの政府留学促進機関）が連携し、生徒のICT活用能力や英語でのコミュニケーション能力向上、異文化への理解促進を目的に初めて実施されました。この報告会には8カ国9チームが参加しました。

5人はSDGs（持続可能な開発目標）のウェブサイト製作を目標に、テーマを阿寒地区のエコツーリズムに決めました。

プログラミングや英語での発表など苦労や戸惑いもありましたが、5人は「力を出し切れた。世界に向けて（ウェブサイト）で発信できる力がつきました」と話していました。（2022年7月3日　釧路新聞より）

編集後記

この2年半、私ども、世界中が新型コロナウイルスに振り回されました。マスクの着用に「3密（密閉、密集、密接）」「社会的距離」「黙食」「黙浴」といった新ルールに神経を使いました。

私ども後期高齢者は、家に閉じこもればよい。が、会社員、学生、生徒は会社、大学、学校と常に連絡を取り、業務や学業の続行に励まなければなりません。テレビ回りを飾り、主人または夫人も、息子、娘も液晶パネルを通じての「リモートワーク」に対応を迫られました。

新感染症3年目を迎え、患者数、重症者数、死者数が下降をたどり、会社、学校は無論、飲食店街、大規模スポーツ競技場やイベント会場がわずかながら活気を取り戻したかのようです。いわゆる「ポストコロナ」で完全消滅させるというより、「ウイズコロナ」で半殺し状態を保ちつつ、徐々に消滅を図るしか、日本も外国もテはないようです。

＊

コロナ期間中、筆者は最古参の傘寿を迎えました。目をやられ、新聞活字、バス停時刻表、各種伝票を読むにも眼鏡とルーペを組み合わせても駄目。公共機関の手続き書類作成にはナキが入りました。

親しい知人の紹介で鳥取大通のT眼科を薦められました。白内障と分かり、手術は半年後、右目と左目別々に9月に実施と、先生から告げられました。

「水晶体も網膜もノコギリのようなメスでギリギリ」というのは筆者の思い込み。先生は簡単な麻酔と（水晶体から濁りを取り除く）手術とだけ説明して、所要5分で1回目完了。2回目パス。

「ありがとうT先生！お陰さまで中学生に戻ったみたい」と喜んでいます。何せ死ぬまで駄目と思い込んでいた視力が回復。英和のポケット辞典の極細（ごくぼそ）の活字が再び読めるようになったのですから。

（注）コロナ情報は7月4日現在。

堀川春昭（湖陵12期）

釧路湖陵高校
〒085－0814
釧路市緑ケ岡3丁目1番
TEL（0154）43－3131
ホームページ
http://www.koryo946.hokkaido-ed.jp/

くまざさ編集委員会

同窓会会長　島本幸一（湖陵19期）
同窓会幹事長　青木一晃（湖陵27期）
同窓会会計長　佐藤文昭（湖陵22期）
編集委員長　星　匠（湖陵30期）
編集委員　堀川春昭（湖陵12期）
編集委員　奥田泰朗（湖陵25期）
編集委員　山木誠一（湖陵36期）
編集委員　西村貞広（湖陵30期）
編集委員　須貝喜治（湖陵49期）

くまざさ編集委員会
〒085－8650
釧路市黒金町7－3
釧路新聞社内　星　匠
TEL0154（22）1111
FAX0154（22）0050